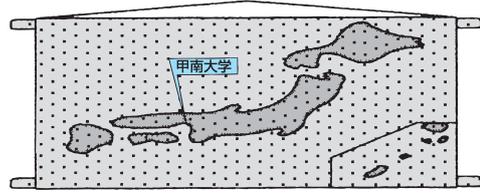


Zephyr

〈第90号〉

ゼフィール・にしかぜ



<https://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊これからの外国語教育について》

〔フランス語〕 何のために大学で外国語を学ぶのか？—フランス語を例に—	中村 典子	2
〔日本語〕 これからの日本語教育について	谷守 正寛	3
〔国際理解〕 国際理解に必要な知識と能力とは？②		
～各国の「主義」と行動パターンを読むこと～	小西 幸男	4
おすすめの本		5
言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 これまでのテーマ一覧		6

甲南学園創設者

平生鈺三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年2回刊行）

1994年度に発足した国際言語文化センターは、大学の組織再編に伴い2022年度より全学教育推進機構のもとで外国語・国際言語文化に関する調査・研究などを行うセンターとしての役割を担ってきました。この間に、研究論文などを掲載した紀要『言語と文化』を第29号まで発行し、機関紙であるこの「ゼフィール・にしかぜ」も2023年度までは年3回、2024年度以降は年2回発行し、外国語・異文化理解に関する情報を発信してきました。さらに、言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会を開催することで外国語教育に関する研究交流を行い、国際言語文化センター講演会では広く地域の方々などにも参加して頂き国際理解に関する知見を共有してきました。

2026年度からは、国際言語文化センターが担った役割を継承発展させ、後述する2つの新しい目的も加えて、グローバル教育センターを発足することで準備が進んでいます。新しい目的の第1は、増加しつつある正規留学生について受験から大学での学修、就職など進路支援、卒業後のつながりまで包括的に支援することです。第2に、現在の文部科学省の取り組みである多文化共修教育を進める事で、留学生と一般の学生が互いの文化的背景を活かしながら学びあえる多文化共修教育プログラムを推進することです。これまでの国際言語文化センターの取り組みに対するみなさまのご協力に感謝すると共に、来年度に発足するグローバル教育センターにもご理解とご支援をいただけますようお願いいたします。

（高 龍秀）

何のために大学で外国語を学ぶのか？ —フランス語を例に—

国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

この夏、フランスへ行った学生から聞いた話ですが、空港ホテルのカフェで、スマートフォンの翻訳アプリの「音声」を活用してイタリア人と会話したというのです。Google 翻訳などのソフトを使えば、知らない外国語で「会話」できたり、文章の大筋を理解できるので便利です。生成 AI に問題を打ち込めば、書き換え問題や正誤問題にも正解を出してくれるそうです。もはや以前のように外国語の文法などを熱心に学ぶ必要はないのでしょうか？

ここで、何のために大学で外国語を学ぶのかを考えてみたいと思います。想定できる答えは、①母語の異なる人々とコミュニケーションするため。②海外の大学で学ぶときに必要だから。③就職活動などに役立つ外国語の資格を取るため。④外国語で文献を読むため。⑤卒業に必要な単位であるから。それぞれの理由は理解できます。私自身は、大学では知識を得るだけでなく、複眼的な物の見方、分析の仕方を学ぶことが重要だと考えており、外国語学習は「批判的思考力を養成する」のに役立ちます。批判的思考力とは、フランス語では *esprit critique*、英語では *critical thinking* です。翻訳ソフトや生成 AI に頼ってはいは「批判的思考力」は身につけません。

一例としてサン＝テグジュペリ Saint-Exupéry の『星の王子さま』 *Le petit prince* の一節をみましょう。狐が登場する第 21 章には「大切なことは目には見えないんだ」 (*L'essentiel est invisible pour les yeux.*) という有名な表現がありますが、最初の部分に次のような一節があります。

- Les hommes, dit le renard, ils ont des fusils et ils chassent. C'est bien gênant ! Ils élèvent aussi des poules. C'est leur seul intérêt. Tu cherches des poules ?

A 【名訳の誉れ高い内藤濯訳】「人間ってやつあ、鉄砲もってて、狩をするんだから、おれたち、全く手も足もでないよ。ニワトリも飼ってるんだが、それよりほかに、人間ってやつにゃ、趣味がないときてるんだ。あんた、ニワトリさがしているのかい？」

B 【翻訳ソフト DeepL】「人間はね」と狐は言った。「彼らは銃を持っていて、狩りをしている。とても厄介だ！彼らは鶏も飼っている。それが彼らの唯一の興味だ。鶏を探しているのかい？」

C 【筆者訳】狐は言った。「人間は鉄砲を持って狩りをする。まったく困ったもんだよ。彼らはニワトリも飼ってる。人間のいいところってそれだけ。君はニワトリを探してるの？」

数年前、「上級フランス語 I」の授業でこの章を学生たちと読み、読解後には邦訳も紹介しました。その際、A と B の下線部の訳が間違っていることに私は気づきました。なぜ、狐が人間の「趣味」や「興味」について語る必要があるのでしょうか？ C'est leur seul intérêt. というのは、狐にとっての人間の利点 (intérêt) を言っているのに違いないと私は感じました。狐は肉食に近い雑食動物でニワトリ・ウサギ・ネズミなどの小動物を主として食べます。C の私の解釈が間違っていないことは複数のフランス語母語話者にも確かめました。論理的に考えると邦訳のおかしな部分に気づきます。外国語学習を通じてコミュニケーション能力だけでなく、「批判的思考力」を養成することが重要です。

1968 年公開のスタンレー・キューブリックの映画『2001 年 宇宙の旅』 (*2001: A Space Odyssey*) をご存じですか？人工知能 HAL9000 というコンピューターが人間を裏切ってしまうのです。「そうしたことがいつか起きるかもしれない」と私は空想することがあります。

とはいえ、翻訳ソフトには利点もあり、フランス語の中級文法の授業で条件法（英語では仮定法）を扱うとき、「英語ではどうなりますか？」と学生に聞き、DeepL で一緒に確認し、翻訳ソフトが時々間違っていることも発見します。先日、「ヨーロッパの言語と社会」の講義で、フランスの婚姻事情を説明する際、*ban de mariage* というフランス語のサイトを試しに自動翻訳すると「結婚の禁止令」と出てきたので驚きました。DeepL も同じ訳でした。英語の *ban* で解釈したのでしょうか？フランスで必要な「結婚の事前公示」のことです。フランス語では、英語より多義語が多いので、辞書を引き、考えることが求められます。

これからの日本語教育について

国際言語文化センター兼任研究員 谷守 正寛

外国語としての日本語の教育に関わる立場から述べます。一般学生と同様に単位を取得して大学を卒業する学部留学生の場合は科目名を「大学日本語入門」といってもすでに上級レベルであり、初修外国語教育とは異なります。そういったレベルの学生に改めて日本語のこういった部分を大学レベルで教えるのかがそれなりに問題になります。レベルは何年も学習した既修外国語の英語と似ていますが、彼らは多くの共通・専門科目などで一般学生と同じく日本語で勉強しているわけですから、上級日本語の教科書であってもそこに書いてある内容の方が平易であったり興味を引くほどのものでなかったりするなど、またふだんの学生生活も日本語で行うために他の既修外国語とは事情がまったく異なるわけです。

日本に住んでいる以上、日本語で接する情報で興味を引くものは学生ごとに千差万別です。日本語教育に文化教育を取り入れるといった教授法も散見しますが、文化という漠然としたものをまだ完璧ではない言語能力の学習者に教えるのも超上級日本語をめざすなら効果があるとは思えません。文化の情報はあくまで言語学習に利用するものであって、やはり言語を中心に教えるべきでしょう。個々の分野の文化を学ぶ機会ならいくらでもほかにあるからです。そうすると、日本語学的な内容を取り込んで超上級の日本語を扱うなどして母語話者並みの日本語をめざし、日本語学習を軸足としながら進学や就活のための実践的な学習など、社会で通用する母語レベルの日本語を学ばせるための創意工夫が有用と考えます。

さて今後は教室内であっても「個別最適化学習」的な要素を取り入れた教育が可能になるかもしれません。昨今普及してきた個別の学習者に応じた内容や速さで学習を支援するシステムが幼児教育レベルからすでに構築されています。例えばジャストシステム社のスマイルゼミや進研ゼミにそういったものがあります。紙ベースであれば旧来の公文式塾での学習法でしょうか。簡単な例として漢字を学ぶ場合であれば、各端末で学習者の進度に合わせて次々と漢字が提供され（筆順も視覚的に表示され）、選択式解答法に限らず画面にタッチペンで答を書いても機械が解読し、採点も評価も自動的に行われ、質疑応答やアドバイスも機械（AI）がフィードバックしてくれますから、学習効果ははるかに効率的です。文字表記や語彙、文法の選択問題に限らず聴解や会話、文章作成であっても今ではデータを読み取って処理可能ですから、ある程度まで個別最適化学習が有効でしょう。初級やゼロレベルからであれば一斉に提供する教授材料に乗っかって従前通りの指導をするのがよいので、一定程度期待はできます。ところが実は、専門レベルであればAIを利用して自分に合った学習項目や方法を自分でカスタマイズすることが今では可能となっています。大学生であれば初歩的な端末機なら用無しになるでしょう。今後そうなれば教員は機械にできないより高度な側面から対面で学習指導をすることが必要になります。AIは相談に乗ることができても限界はありますから、教員による指導ではより高度で創造的なものを追求する方向に進めることが求められます。

最近「やさしい日本語」という日本語教育の分野を耳にします。難しい表示や説明を日本語の分からない者にも分かるように、平易な表現で言い換えたものを教えるものですが、例えば「台風の影響でA-B間は現在JRが不通となっております」ならふりがなを付けて「台風のため、A-Bの間は、今電車が止まっています」と言い換えるわけです。しかしこの程度の情報なら急速な技術進歩によって早晚無用なものになると予想します。例えばGoogle翻訳をスマホのカメラに設定していくら難解な日本語表示でもそれにかざせば、即座に画面に翻訳された文字が表示されますから、高度な内容であっても十分に理解でき、やさしい日本語で書かれた浅い内容の理解よりもはるかに有用で即戦的です。さらに音声による出力も可能です。このようなツールも学習者がカスタマイズすれば高度な専門学習をサポートしてくれます。これからの外国語教育においては、こうした有用な手段を教員が教室で実際に利用しなくとも、それらが存在することを前提にした指導を創意工夫し、教員ならではの専門性や特性を生かした教育を開発しなければならぬと思われまます。

国際理解に必要な知識と能力とは？ ② ～各国の「主義」と行動パターンを読むこと

国際言語文化センター兼任研究員 小西 幸男

前回に引き続き、国際理解に必要な知識の一つとして、今回は国家について考えてみます。国際理解とは、友好のための感情論だけでも、理念の押し付けでも達成されません。各国がそれぞれ異なる制度、歴史、価値観のもとに行動しているという前提を認め、その行動の背後にある構造的要因と合理性を読むことが重要です。こうした理解があって初めて、誤解や偏見を越えた対話の可能性が生まれるのです。国際社会を理解するうえで、「あの国は何主義か」という問いはしばしば出発点とすることができます。資本主義、社会主義、権威主義、自由民主主義などの区分は、国家の制度や政治運営を語るうえで基本的な枠組みです。国際理解は、単にラベルを貼る作業ではなく、その主義が国家の思考様式や行動選択にどのような“パターン”を与えているのかを読み解く作業でもあるのです。国際社会と密接に関連する「経済」は限りある資源を使って財やサービスを生産し、それを分配・消費する人間社会のシステムのことです。普段の生活の中で展開される経済活動という言葉はいずれの国でも同じ感覚のものであろうと考えてしまうことが多いですが、実はそれぞれの国家がどのような主義を取っているかによって、システムの在り方や企業の経済活動、富とその分配の仕方も違ってきます。

たとえば自由民主主義国家は、政治的自由や法の支配を正統性の基盤に置きやすい。そのため外交においても、同様の価値観を共有する国々と協調する傾向が強く、国際制度の枠組み（国連・同盟・自由貿易体制）を重視します。これは国家が善意で制度を守るというより、制度が自国の繁栄と安定に資するという合理的判断にもとづいているのです。日本は戦後の憲法をもとに権利を国が保障する制度をもった社会主義的な制度を高度に作り上げてきた国でもあるのです。

一方、権威主義的な国家では、国内統治の安定性が国家利益の中核に置かれやすく、国内の政治的不満が体制を揺るがすリスクを避けるため、外部からの価値観の流入に慎重となり、情報統制や領域保全に敏感になります。こうした特徴は、対外的には強固な主権尊重の姿勢、内向きの経済運営、あるいは軍事的抑止力強化という形で現れやすいともいえます。

社会主義的な枠組みを維持する国家では、国家による経済管理や福祉の提供が政治的正統性に結び付いています。したがって外部からの市場圧力や資本流入は慎重に制御されることが多く、国外から見れば「閉じた経済」に見えることもあります。しかし内部から見れば、これは体制の安定と再分配機能を守る行動パターンなのです。

このように、各国の行動にはそれぞれ固有の「合理性」があります。国際理解を深めるとは、これらの合理性を自国の価値観に照らして判断するのではなく、“その国が何を守ろうとしているのか”という視点で理解することです。これは国際政治学のリアリズムが指摘する「国家は安全と利益を最大化する主体である」という前提とも整合します。国家が何主義であれ、国内制度と歴史的経験がその行動選択を方向付けているのです。現在のアメリカのような急激な体制変化はとても混乱した状況にあるといえるかもしれません。



『国語学論考』（湯沢幸吉郎）

八雲書林、1940年

おすすめの本といっても専門書であり、しかも戦時中のものなので所蔵図書館では閲覧できませんが、買って読んでみてくださいという意図はありません。そこで内容の知見の一部をエッセイ風に簡単に紹介して私見を添えます。

この本の中には日本語の構文の謎に迫るヒントがあります。筆者の近刊『日本語構文新論』（新典社、2026年1月）でも大いに参考になった知見が述べられており、重要な参考文献の一つです。主語を表す「が」は上代では連体格助詞であり、現代のように主格を示すようになったのが室町時代後期以降だというのはあまり知られていませんが、それを踏まえて同書の知見を考察すると面白いことが分かります。例えば「馬の暴れたる」というのは、連体形を前に置いて「暴れたる馬」と言えばよいのを、わざわざ「の」を介して入れ換えています。「暴れたる馬をなだむる」と言うのと「馬の暴れたるをなだむる」と言うのとでは何が違うのでしょうか。「馬が暴れたるをなだむる」も言えます。ここに日本語構文を解く鍵があります。

同書ではこの「の」の使い方を英語の「関係代名詞的な用法」と呼びます。英文法の用語なので突拍子のないように聞こえますが、戦前にこうした斬新な考えを示したことは驚きです。この考えは現代では評価されないものの、『助詞の歴史的研究』（石垣謙二著、岩波書店、1955年）にも引き継がれているのを筆者は大いに評価し、自著に援用しました。紙幅の関係で詳述しませんが、AIに質問すると関係代名詞的な用法というのを評価しながらも湯沢の名も石垣の名も出てきませんし、AIがさらに応えようとするので深掘りして質問しても、お門違いな同じ説明を繰り返すばかりで埒があきません。現状のAIにはまだまだ限界があって、ネットに挙げられていなければ無知であり、専門的なことを追究しても湯沢の知見には及ばない的外れな回答の繰り返しにとどまるというのが分かったことで、古い本には埋もれた有用な知見が眠っていることが分かったというお話です。（谷守正寛）

『格差と分断のアメリカ』（西山隆行）

東京堂出版

一見すると“自由と民主主義の国”であるアメリカ合衆国が、現代になってなぜ“格差と分断”の問題を抱えているかを、政治制度・社会構造・歴史・政策などさまざまな観点から分析した一冊です。アメリカ政治を専門とする西山隆行先生の分析は、多面的でありながらもわかりやすくアメリカの現状と構造を体系的に読ませてくれる章立てになっています。

目次をみると政治制度（大統領・選挙・二大政党）、社会問題（宗教・他民族・銃と暴力）、メディア、そして最終章で「格差と分断」をテーマにつづられています。大統領に翻弄されるアメリカは、その仕組み・権力の強さと限界がそこにはあって、日本の政治運営とは全く異なっています。簡単にいうと大統領の個性や政策が国を大きく揺さぶります。また、政治・文化・価値観が宗教と深く関わる国でもあります。多民族国家アメリカは多様な人種・民族の存在が社会に摩擦を起こすこともあります。昨年の大統領選でも明らかであったようにメディア大国であるアメリカは情報の流れが政治・社会に与える影響が大きいです。現在問題となっている銃犯罪、移民排斥、差別、貧富の差、社会分断、政治的分極化は決して最近だけの現象ではなく、アメリカ建国以来、積み重ねてきた歴史に加え、制度的な構造によって生み出されています。「富と機会の不平等」「制度的不平等」「社会的・文化的分断」が作用し、アメリカの社会を根深い危機構造に陥れていることがこの本を読むことで、超大国として抱える内部構造の矛盾を制度・歴史・文化・社会の総体として理解できます。日本はアメリカとの関係がとても強い国です。アメリカの内政問題が国際関係に大きく影響をあたえ、一喜一憂する日本の未来を考えるためにもどのように付き合っていくべきかを解明するために大変役立つ一冊です。ぜひ、手に取って読んでみてください。（小西幸男）

言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 これまでのテーマ一覧

	開催日	テーマ
1	1994/11/26	東大教養学部における外国語カリキュラム改革
2	1995/11/25	衛星放送ニュースの聞き取り -新しい英語教育をさぐる-
3	1996/11/2	日本の言語教育：その現在と将来
4	1997/10/18	本格的なネットワーク時代の到来と外国語教育
5	1998/7/4	言語教授方法をめぐって
6	1998/10/31	大学における外国語教育
7	1999/6/26	コミュニケーションな外国語教授法をめぐって
8	1999/11/13	リズム-外国語の習得において忘れられがちなもの
9	2000/7/8	〈シンポジウム〉大学における語学の授業法をめぐって
10	2000/12/2	脳のしくみから見た効果的な外国語教育
11	2001/7/7	未知の言語の習得 -外国語教育のヒントとして-
12	2002/3/26 ~28	〈国際交流言語コロキウム〉 言語理論と言語教育
13	2002/7/13	学習者中心の外国語教育を考える
14	2002/11/9	学生の学びの意欲を高める外国語教育 ストラテジー
15	2003/7/12	〈フォーラムディスカッション〉 私の外国語学習法-参加者の経験を 交えて-
16	2003/11/1	マルチメディア教室・CALL 教室での 授業の有効性と可能性
17	2004/7/10	仕事と外国語-卒業生大いに語る-
18	2004/11/13	外交官の外国語習得、諸外国の外務省の 通訳養成について
19	2005/7/2	〈国際シンポジウム〉 第二次世界大戦後60年の総決算 -アジアの若者の未来のために-
20	2005/11/12	外国語の授業における言語と文化の総合的 学習-実践報告と今後の課題-
21	2006/6/24	留学してわかったこと-留学の意義、 海外での日常体験、教育内容について 経験者が本音で語ります-
22	2006/11/18	〈国際シンポジウム〉 多文化社会へ向けて-海外の実情を知り、 日本の可能性を探る-
23	2007/7/7	外国語教授法の新たな試み
24	2007/12/15	外国語教育を通しての異文化・自文化 理解
25	2008/6/14	頭と心を動かす外国語の授業
26	2008/12/6	学生の海外スポーツ遠征と国際理解
27	2009/7/11	教えることとは？学ぶこととは？ -教育心理学の立場から
28	2009/12/12	国際言語文化センター開設15周年 記念フォーラム
29	2010/7/10	外国語教育で多読を成功させるには
30	2010/12/4	〈国際シンポジウム〉 アジア圏の人々にとっての多文化共生 社会の現状と未来
特別 研究会	2011/3/9	外国語教育における ICT 活用の現在
31	2011/7/2	国際理解教育の課題
32	2011/12/3	留学を通して学んだこと -留学、帰国、そして現在の私-

	開催日	テーマ
特別 研究会	2012/3/21	教室から学びを開放する試みと ICT の活用 - SFC(慶応義塾大学湘南藤 沢キャンパス)の外国語教育
33	2012/7/21	グローバル化時代の大学教育 -社会は君に何を求めているか？
34	2012/12/8	日本の社会と文化への適応
特別 研究会	2013/3/26	留学におけるホームステイの役割 -異文化適応プロセスの中での留 学生評価
35	2013/7/20	大学の外国語教育-今後の方向性-
36	2013/12/7	映画を活用した外国語教育
37	2014/7/5	大学の外国語教育 -学生の学ぶ意欲を高めるために-
38	2014/11/29	効果的な語学学習法
特別 研究会	2015/3/18	FD ワークショップ：どの外国語の 授業にも応用できる授業方法の紹介
39	2015/6/13	効果的な語学学習法 Part2
40	2015/12/11	グローバル時代の文化理解と教育
特別 研究会	2016/3/16	日本の大学における韓国語教育の現 況と課題
41	2016/6/29	先輩から学ぼう：留学成功への道・ 外国語検定試験攻略
42	2016/11/2	グローバル時代の文化理解
特別 研究会	2017/3/21	外国語教育とアクティブラーニング 「深い学び」を目指して~教科書づ くり・授業づくりの現場から~
43	2017/6/24	大学教育におけるアクティブラーニング
44	2017/11/25	〈国際シンポジウム〉 北米の多文化共生社会の現状と未来
45	2018/6/16	外国語学習者の自律性を高めるために
46	2018/12/1	外国語の授業における学習支援 ~配慮の必要な学生のために私たち がすべきこと・できること~
47	2019/7/6	スマホ・AIの活用による外国語授業
48	2019/11/16	CLIL (内容言語統合型学習) の言 語教育カリキュラムへの応用
49	2020/12/19	コロナ禍における外国語教育 -日本語の場合-
特別 研究会	2021/3/10	観察が鋭い！25年間の教員生活で 学んだこと
50	2021/7/3	オンラインを活用した外国語教育の 実践~学習者の自律学習の促進に向 けて~
51	2021/12/11	COIL 型授業の可能性 -アフターコロナを見据えて
特別 研究会	2022/3/12	日本における40年間のフランス語 教育を振り返って
52	2022/7/9	外国語教授法と誤用の分析
53	2022/12/17	大学の外国語教育の目的とその変遷
54	2024/2/17	大学におけるライティング教育のこ れまでとこれから-初年次教育・日 本語教育での実践をもとに-
55	2024/7/6	外国語のオンライン授業のこれから -学生の動機づけの観点から考える- フランス語学習者を対象に
56	2025/2/8	「是…的」文の誤用と教授法
57	2025/9/17	英語検定試験とその指導について~ 花より単語、論より熟語、棚からポ キャプラー